

## COE 出張報告

印刷媒体班 永原陽子

- < 期間 > 2004 年 8 月 14 日～8 月 28 日
- < 出張先 > ウィンドフーク（ナミビア大学およびナミビア国立文書館）  
ケープタウン（ケープタウン大学）、ロンドン（国立文書館）
- < 目的 > 20 世紀初頭ナミビア史にかんする史・資料収集および関連  
学会への参加

今回の出張は、20 世紀初頭のナミビア史、とりわけ 1904 年の反植民地蜂起とそれをと  
りまく国際関係にかんする史・資料の収集とそれに関連したテーマでナミビア大学におい  
て行われた国際学会に参加することを目的とした。

まず最初にナミビアのウィンドフークのナミビア国立文書館で、ドイツ植民地期の史料  
（ZBU と分類されているもの）の最近の整備状況について調査した。すべてがマイクロフ  
ィルム化されている「西南アフリカ」統治関係の文書についてはこれまでも筆者は閲覧・  
利用してきたが、ちょうど今夏（現地は冬）に他の全ドイツ領植民地関係の文書がドイツ・  
ベルリン＝リヒターフェルデの国立文書館から寄贈されたことで、比較史的な研究や植民  
地相互の関連をとらえる研究のための基本的な史料が揃うことになった。寄贈は、100 年  
前のドイツ支配下でおこった絶滅戦争の被害に対するドイツ側からの和解のしるしとして  
実現されたもので、植民地の歴史を双方が記憶しその研究を異なる立場の歴史家が協力し  
て深めるための重要な契機となるものである。そのようなナミビア国立文書館の最新の史  
料状況について、同文書館の W.Hillerbrecht 氏および、教育相の文書館担当官 E.Namhilla  
氏と話をした。

8 月 17 日から 21 日までは、ナミビア大学歴史学科の組織した国際会議「ナミビア史を  
解毒する」が開かれた。この会議は 1904 年に始まったヘレロ・ナマ両民族を中心とする  
反植民地蜂起の 100 周年を記念し、従来のナミビア史研究を総点検する目的で開かれた。  
会議の名称の「解毒する」には、ナミビア史の叙述をヨーロッパ中心的あるいはエスノ・  
ナショナリスティックな偏見から解放する、との意味が込められている。内外の研究者と  
ナミビア市民約 150 名が参集したこの会議では、植民地前期から現代までのナミビア史に  
かかわる様々なテーマの報告が行われたばかりでなく、殺戮戦争の犠牲者の末裔たちから  
歴史を誰がどう書くのかについての厳しい問いかけがなされ、白熱した議論が繰り広げら  
れた。筆者は、1904 年蜂起に対する鎮圧戦争の被害に関連して現在ヘレロの人々から出さ  
れている補償要求を、世界史の中での戦争責任概念から植民地支配の「責任」概念への展  
開の流れの中で位置づける報告を行った。

この後、ケープタウンで短時日ながら最新の南部アフリカ研究にかんする文献資料の収  
集を行い、つづいてロンドンに移動した。

ロンドンでは、国立文書館所蔵の外務省文書のうち第一次世界大戦前期のナミビア関係  
史料の所蔵状況について調査し、その一部を閲覧した。とくに 1904 年蜂起にかんするイ  
ギリス側の対応にかんする史料を発見できたことが大きな収穫だった。

今回の出張は短期だったため、ウィンドフイークおよびケープタウンではごく限定された史料のみを調査し、またロンドンでは今後の本格的な調査のための下準備といった意味合いでの調査となったが、従来のドイツ帝国との関係のみに収斂されがちだった第一次世界大戦前期のナミビア史研究を南部アフリカ地域史の中で、そしてヨーロッパ諸国の全体的な動きとの関連でとらえるための史料についての見通しを得ることができ、たいへん有益であった。またそれ以上に有意義だったのは、今年 100 周年を迎え、多くの関心を集めている 1904 年蜂起について、様々な地域の出身の歴史家たちと最新の研究状況について意見交換し、さらに何よりも当事者である一般のナミビアの人々と、この地域の歴史についての歴史研究者の研究姿勢を根底から問い直されるような議論をたたかわすことができたことは、きわめて有意義だった。

この時期にこのような出張を可能にくださった COE 関係者の皆様に感謝する次第です。